シモマッチの
校長随想

～教育は過去からの贈り物、そして未来へのメッセージ～

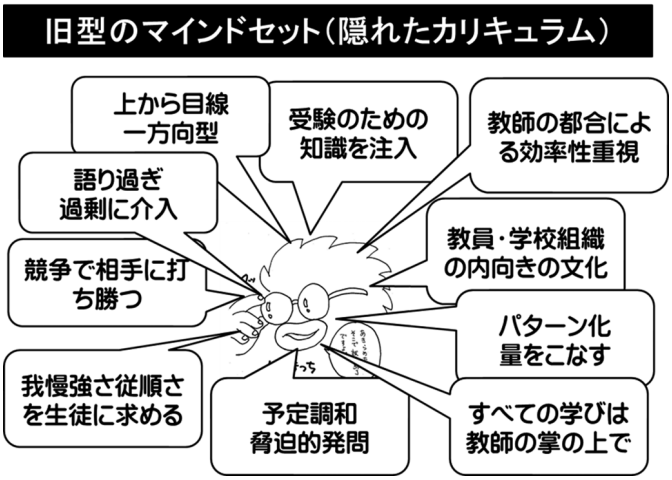
下町壽男　盛岡中央高校附属中学校副校長

第19回
組織の理念と教師の見識は相補的

□カッコイイ教師像

私は講演の中で「教師の見識・マインド」の変化の話をすることがあります。まず、次のスライドを見てもらいます。

これは、教師の都合優先の「マスプロ型教育」のマインドを特徴的に示したものです。教室に君臨する暴君というテイですね。これを踏まえつつ、これからのカッコイイ教師に求められる見識とはどのようなものか話し合ってもらいます。すると、例えばこんな意見が出されます。



「変化に対応できる人」「子どもとともに考える人」「学び続ける人」「他者の意見を傾聴できる人」「子どもがどこでつまずくかわかっている人」「話し上手であるとともに聴き上手な人」「仕事を楽しむ人」等々。私がなるほどと唸ったのが「専門性が高くそれをベースにした柔軟性と多様性を持つ教師」という意見です。これを話されたのは、60代のベテラン教師でした。

少し前に、アクティブ・ラーニングをめぐって百家争鳴の議論が起こりました。そのとき、学校現場では推進派、否定派、懐疑派、革新派、無関心派（評論家派）といった旗色がつまびらかになったように思います。特に否定派の先生方から「アクティブ・ラーニングを推進する先生たちの教材研究が薄っぺらである」という批判が叫ばれました。そして「活動ありて学びなし」「ディープな教材研究に基づいた指導力」など、「活動VS教材観（指導力）」という文

脈で語られてきたように思います。

そのような中、この60代ベテラン教師の言葉は非常に重いものであると私は思います。彼は、専門性が低い、単なるにぎやかしの授業に警鐘を鳴らします。でもその一方で、高い専門性だけではだめで、変化を受け入れ、自らを変えていくことを恐れない教師像を提示しています。それはまさに、歳をとっても常に自らを更新していこうとする、その先生の姿そのものでもあると思いました。私は50代後半から、授業スタイルを学習パラダイム型に変えて大きな成果をあげている先生方を何人も知っています。いわば、年配の先生方にとってアクティブ・ラーニングは「鬼に金棒」ではないかと思うのです。

□ 学校経営と授業経営の親和性

かつて私は、年間の授業計画をつくるとき、次のことに注意していました。

①生徒・保護者のニーズや、生徒の習熟の状態がどうであるかといった実態を把握し、その上で、どうすれば学力を上げることができるかを考える。

②前年・例年のやり方を振り返る。

③その上で年間授業計画、評価規準、家庭学習課題、テスト、副教材選定などの具体的計画を練る。

私は管理職になり、授業計画をつくることはなくなりました。そのかわり、学校経営計画をつくらなければなりません。私は、亀井浩明帝京大名誉教授の提言を参考に、次のようなスキームで考えていました。

「社会全体の動向の認識」「生徒の生活・心・学習の実態の理解」「学校が直面する課題の認識と対応力」「国・教育委員会の基本方針の理解」「保護者の期待・要望の理解と方策の明確化」「学校内外の多様な教育資源の活用」「人間らしい生き方についての哲学的考察」「組織体の経営という発想」「現代社会の人間の抱える共通課題の理解」「生徒の心の指導の基本を提示」

このような視点で経営計画をつくっていたとき、私はあることに気づきました。それは、学校経営計画をつくるための見識と授業計画をつくるための見識は、その根っ子の部分で見事につながっているのではないかということでした。

例えば「社会全体の動向の認識」は授業計画でいえば「社会の中において教科を学ぶ意義を考える」ということになるだろうし、「保護者の期待・要望の理解と方策の明確化」は「期待に応えるだけではなくニーズを創り出し学習者自身につかませる」と置き換えることができます。そのようにして対照表をつくってみると、学校マネジメントで「アクティブラーナーを生み出す組織をつくりだす」ことを目指すなら、授業マネジメントでは「主体的・対話的で深い学びを生み出す場を構築する」ことであるというように、両者の親和性、相補的な関係性を強く実感することができました。

つまり、授業計画とは、日々の授業をどうするかというプラクティカルな問いを超えて、ある種の理念、哲学を持つこと、つまり教師の見識が問われるのではないかということです。それは、ＡＩが追いつけないところの、教師としてのインテリジェンスなのかもしれません。